歌日記

歌日記

西島喜代之助

大阪鑄接棒工業協同組合

西島喜代之助

事務所　大阪市北區宗是町
大阪ビル六階第六七一号室
電話土佐堀(44)三三〇二・三三〇三番

歌日記

西島喜代之助著

西 島 夫 妻 （昭和33年頃）

目次

歌日記……一
「きさらぎ」より……一六九
病床歌……一九一
絶詠……二一七
年譜……二二一
あとがき……二四一

歌日記

昭和三十四年

年賀状に二首

うつし世はきびしけれども元日の未明の町は音なかりけり

昔ぶり雑煮を祝ふ箸紙にこの春も書けりわが名妻の名

後日長沖英一君よりわが名妻の名は癖だと書いて来た

君は早く妻失ひし友

元　日

年明けぬ松を飾れるわが門に國旗を立てゝこゝろ明るき

元朝をモーニング着て來し人と禮交はしつゝ雨をわぶるも

屠蘇すぎてねぶたくなりぬ老らくのなすこともなき雨の元日

遠き人むかしの友をおもひつゝ年賀状かく年賀状よむ

一月二日　夜をたのしく（一）

隣りびとつどひ来りてむれ遊ぶ正月の夜はのどかなるかも

歌かるたわれは詠み手よたぬしげに並べし札を見つむる侶ら

上の句をよみしたまゆら声あげてほゝ笑める顔惜しさうな顔

入り替り交ればわれもしかすがに心はしまり歌牌みつむる

老らくのかなしきかもよ目の前の得意（おはこ）の札をあたら奪られぬ

元日は街燈ともらぬ若き日の夜のかるた會ふとおもひ出づ

海軍の軍医の家に少女ありき亡き妹のよき友なりき

奪られし札奪ひ返すと争ひて手をば握りて指ひらかせし

座ははづみ声はあがりて手はのびぬおもひで忘れてわれもうつゝに

老い若き男をんなのひたむきに歌牌見つむる目の真剣さ

夜のふけも知らで人らのいにしのち時計を見れば一時半なり

ちらばれる蜜柑の皮ら片づけて寝まらくあすもわれに吉き日ぞ

一月三日　夜をたのしく（二）

京に祝ぐ終（はて）の初春と下ごゝろ妻おもふらし今宵も人喚ぶ

一年間勉強すると歌かるたの研究書もちて教授も来り

正月も三日となりぬこの宵はトランプよと早も札くばるなり

いく度か勝負きまりて化粧せる若妻も顔に墨塗られけり

塗らせじと顔を掩へる手の白さ笑みてひそかに夫の見入れる

父のなき男女の中學生もわれと遊ぶよ今宵たのしく

人来りわれはゆく（一）

三ヒユクタケルの電報きそ来つれ待ちがて昼をひとり酒のむ

靴音は吾子の靴音われ見まく伊勢ゆ来りし吾子の靴音

偕に住まむ春を語りてよろこばふ吾子と笑ましくまた酒を酌む

うましもよ海の幸ゆたに初春をめづらしみ食す伊勢えびの味

潮の音忘れてのどに遊べとし親はおもへど公吏はかなし

浪華よりまれ人の来ていにし子にさびしむ心とり戻したり

三人妻を失ひしわれより若き友は多くは飲まず言も少き

吸ふ烟草のけむりにまぎらし病める日をつばらに語る目をうるませて

一月四日　人来りわれはゆく（二）

國境を三たび越えつゝ電車バスわれ乗せてゆく和泉國原

曇り空降るもまたよしや子ら孫ら待つとおもへば遙けくもあるか

着飾りし織女もけふは働くか空席多きバス揺れゆれに

沿道の藪も林も目に親しいく度渡る川の流れも

門に出でゝ友と遊べるうまし孫われを見つけて走りよりくも

尋小の孫がよせし文ほしきもの並べてお年玉もと書きてありしか

うらうらに座椅子に倚りてテレビ見るのどけき午後もわれにありけり

庭ひろし三十羽の鶏(とり)首並べ餌をあさるなるくゝと啼きつゝ

スナップの写真をとるとカメラもち庭の廣場を婿をちこちす

松林庭につゞきて丘なせり初春の日はうらゝにさして

井戸のみに乏しき水をたきくれしわが肌によきこれのぬるま湯

熱ければうめよまた焚くといふ吾娘(あこ)を窓の外にきゝて湯に浸り居り

身拭ひて湯殿出づればやさしくも夫の着替を着せかけくれし

くつろぎてわがうからゝとすき焼の鍋をかこみて夕ぐれにけり

志摩のや安乗の海にとれし鰤汽車に運びてわが贈られし

大き鰤食べて食べ足り土産にと片身を妻の提げて来しかも

煮えたぎつ鍋料理うまし酒うまし孫もうまらに飯食して居り

夜は寒し炬燵に入りて醉ひし目に映るテレビを見るもたのしく

宵ながらねまく欲るわれに花かるたもて来て孫のあそべとしいふ

うからゝも寄りきて遊ぶ花かるた夜を賑ひて山としもなし

うまいせしわれは隣の工場のはた織る音にめざめけるかも

枕べにいつて来ますと娘(こ)の夫(つま)は挨拶せりもはや出勤の朝かも

洗面の水はつめたし山近き靜けき町は風もつめたし

あつき珈琲うましと飲みて共に来し妻をのこしてわれも出でゆく

旅路の果に

十二月三十日長岡市に逝く

新聞は水島爾保布の死を告げぬ君も死にしか旅路のはてに

年賀状付箋して越路ゆかへりきぬ消息知らずなりていくとせ

いと古き歌の友なり画筆とる君とはのちに知りし友なり

画友らと大阪に画展開きしときあひて語りし君なりしかな

画友は浜田葆光、織田一磨、小絲源太郎

画友らと芸妓も交り籤ひきて買物をせし夜もおもひ出づ

朝日新聞社員時代

講演に招きて講師の面知らず出迎へをわれにたのみける君

自動車のなき昔なり朝日新聞の提燈つけし車に乗りて

駅頭に佐々木信綱博士の手握りて宿に案内しけるも

堂島の料亭

つぎの日に電話かゝりて魚岩へ来よと招かる何のゑにしぞ

電話せし間島弟彦は三井銀行の支店長にて未知の歌びと

先生はわれを知る人川田順も招かれて居りはじめてあひぬ

大阪の歌壇に名だゝる花田比露志中村憲吉とも膳並べしか

先生とのつながりかもよこのうたげ君にかかはりなしといへばなし

戦争は歌よむ閑をわれより奪ひ君疎開して遂に相見ず

幸子夫人となどか別れしうらぶれて旅ぢの果に逝きしかなしさ

朝日新聞の社屋仰げば君おもひ下村海南しのびしものを

一月七日　危　し

バスに乗らむと道横切りしたまゆらにあやうしわれは足すべらせぬ

起きあがる途端に見ればトラックが急停車せり身も摺れすれに

危し一秒の差にわが頭骨砕けむものをいのち全けく

顔痛しまろびし際(きは)に打ちにけむ傷つきにけり掌もまた

手巾を血に染めつゝも拾ひけるいのちよろこび次のバスに乗る

一月十五日　小豆粥

注連たく火朝霜白き門のへに焔をあげて赤々と燃ゆ

ならはしの小豆かゆ食し松の内もすぎぬと仕舞ふ鏡餅かな

一月十六日　おめでたう

年賀状くりかへしよむたのしさよ松の内すぎて心ものどに

おぢいちやんに初めて手紙かきにける京（みやこ）の文字も愛しきものを

ことしこそ角帽かぶつておじいさまの前に立ちたいと秀樹は書けり

学友沢野君中風を病む　娘は松本和子

床の上の生活十四年お餅をば三つ頂いたと病父（ちち）をかける娘（こ）よ

新春をほぐ歌に句にめでたしなミツチーブームほのにおぼゆる

熱海　佐々木信綱

新たなる光のもと言新たに祈らく世に国に人に平和あれと

太子の宮み妃迎へますよき年の初日うらゝにかゞよふ国土

山庭は老歌人によき画示すダツラは高くサルビヤは低く

東京　織田信恒

うち日さす都の大路かぎろひて元朝の光空にあまねし

大阪　高原弦太郎

あかつきの光の如く皇太子の妃の御名をわれも仰げり

新しき世紀と仰げ大御子は自ら妃を選び玉へり

愛と智をかねし妃を神も人もこぞりて祝福さゝげ申さむ

東京　高坂清元

野に住みて初日迎ふる清しさやあめつち広く遠き富士見ゆ

横浜　斎藤虎五郎

よその子の羽子つき唄を京にきゝ山河遠き孫思ふかや

大阪　門田鏻

四季咲のバラの苗木を植ゑてみつ咲く日思ひて笑みにける元旦

大阪　菅沼宗四郎

自らの光と知らで太陽は清き夜明けの窓を覗けり

師を語り今日に及べる五十年我の涙は雲を洗へり

大磯　朝場重三

遊び飽きて抛り出したる児の毬にあまねく射せり元日の日は

三百六十五日見あかぬ不二の年明けぬ

東京　杉浦畊作

御降や庵も砌のいさぎよき

屠蘇注ぐや雪晴の窓きらゝかに

東京　渡辺洋吉

子にうくる破魔矢の白さ失ふまじ

浜寺　中島生々庵

初孫の産声待ち待ち屠蘇を酌み

小石

嫁の座もふえて嬉しい祝膳

東京　稲山　正夫

年賀待つ雪の櫓を仰ぎけり

東京　黒川　清雄

妃を迎ふ太子の宮居春うらゝ

大阪　河野　彦治

日暮れて道遠き中の憩かな

京都　長野　十二星

うつり住んでこゝろ新たや山初日

大阪　山瀬　渓石

新しき世代の陽光豊かに菊さかる

一月十七日　黙　禱

幸多きわれかも海の幸山の幸足りて豊けき春ほぎにけり

餅食せば数の子食せばかたじけな吾を飢ゑしめぬ子らに感謝す

灘の酒伏見の酒も人たびぬ老を忘れて夕べを酌むも

われの着る外套も服も亡き友のかたみと思へば肌に暖かき

金沢の菓子珍らしみ黙禱して妻が點(たて)ける茶をいたゞくも

ウキスキー紅茶に入れて飲む朝よ今日も明るくとアナウンスすラヂオ

一月二十日　いのち長く（一）

長きいのち祝ぐとつどへり小學の同窓生の幼な友六人

おない年の喜寿の翁はみづみづし若水会の名に結ばれて

友どちは呉服屋下駄屋僧もあり世にかくれたる歌びとわれは

童心に昔かたれば校庭の木馬目に見ゆすべり台も見ゆ

体操が嫌ひなりしよ召されても弱き兵なりしわれなほ生くる

百歳は願はね生くる甲斐ありしけふをよろこび乾杯するも

一月二十一日

（二）

わがいのちみづからほぐとはろばろし子らも招きてその日を待つも

つどゐこむ子らをたのしみ待つものをさびしき歌をなどかもよめる

歌日記のこのましからぬ歌もわが人生記録と書きにけるかも

一月二十四日　郷　愁

わが去る日近づくと思へば大阪に未練すてがて人のこひしく

帝塚山はふるさと近し郷愁の足はおのづから南に向くも

兼頭未亡人

惜しむらむ人いまはなし惜しまれて先きだちし人もひておとづる

憩ひをば茶に求めつゝやるせなき心の果は歌に頼らすも

みかへればいつまでも立ちて見送らすさびしき君をわれもみかへる

井上かつ

いろいろに薔薇むれて咲く硝子戸の外なる庭は日のあたたかし

手作りて花たのしめるわが従妹こもりてけふはテレビ見て居り

終幕の水谷八重子の狂乱のお夏をわれもかなしみてみつ

六つちがひの叔母はわれをばいつくしみきその子と思へばいや親しもよ

落合詩有

約束の時刻はすぎつれおとなへば炬燵にわれを迎へたまひぬ

二十とせの昔よ君を知りしころ支那とのいくさはげしかりしも

藪かげに菫つみしは君なりきいくさ忘れて嵯峨野ゆきつゝ

良寛を学びけむ文字の美しく歌もみやびぬみやびを君は

いざや飲め別れといひてみづからは飲まぬ瓶子をとらせけるかも

伊勢は近しまたも逢ひ見む機あらめ別れと思へば胸の苦しも

夫がつげば二つき三杯その妹もわがはなむけと盃乾さす

こゝろこもる手料理うましと箸つけて味ひ足らずかへる夜のみち

一月二十五日　東山をゆく

五条阪陶もの店に立ち寄りて楽焼を賞づ春の如き日

壺や皿や楽に焼かれし画に歌に古き都のみやびのこれり

われも描きて子らにのこさまし楽の技工を語り茶すゝり妻をおもへる

坂長し道一すぢに大谷へ架かれる橋に流れ見おろす

障子白し昼をしめたる本堂に経よます声す木魚の音も

母の遺骨こゝに眠らすと吾妹子は蔀おろせる堂に額づく

砂清く掃かれし広き境内は人影もなし大谷御廟

寺内出でし登る裏山坂こゞし右も左も墓どころにて

いく世々の幾多の霊や鎮ませる山も谷も狭に墓の並べる

大き墓も垣はくづれて荒れしあり栄えし家も守る人なきか

わが墓を建つるもいく世誰が守る心の祠堂立つに若かめや

登りつめしこゝは清水春を早み茶店も閉ぢて詣る人稀に

清水坂おなじもの売る店は並べ土産待つ子のなきがさびしさ

道のへののれんの古き骨董屋に一円紙幣も並べてあるも

廃物の如き古物も買客ある太平の世を讃ふべきかな

きゝしのみに初めて仰ぐ混凝土の靈山観音は大き高きかも

魂のなきみ仏が蒼空に大き石くれの如く立たせる

高台寺豊太閤の政所(まんどころ)きかせる鐘をきゝたきものを

春めく日よけて不動尊まつる院に甘酒のむもすさびなりけり

清水を祇園へよぎり疲れたる足たどたどし階段下る

疲れいひて乗りし電車をすぐに下りて河原町ゆく日はくれにけり

あふ人はみな美女にして京の夜は灯もうつくしくろうたけて見ゆ

夜の客

半刻を早くきませば留守なりし吾家(わぎへ)おとなふ声まだ若き

祖母となりし第一年の新春を先づ初孫のすこやかさいふ

娘(こ)を嫁(ゆ)かせ心づかひのなくなりし安けさはあれさびしき日々かも

一月二十八日　暗涙

わが去るをきゝて涙す隣びとを語る吾妹も涙流せり

惜しまれてやがて去りゆく悲しみのわが暗涙は妻のみぞ知る

別れの曲いく度われは奏づらむわが人生のかなしき回転

生徒つれし校長も町長も旗ふりし浜寺を去る電車の窓に

とこしへにかへらぬ吾子の靈守りて住まむと思ひし松風の浜

大阪ゆ移りて住みし高井田もいくとせ遂の奥津城ならず

惜しみつゝ門に立つ人いくたりぞ涙つゝみて去りしおもひで

ちゝのみの父の果てける大阪は終(つひ)の家とぞわが移りこし

苦しき日々耐えつゝなほも戦ひは必ず勝つと励み励ませし

うちつけにわが去(い)ぬ知りて惜しみける人に叛きて京人となりぬ

惜しみても惜しみ足らはず京都まで見おくりくれし人いくたりぞ

かなしみをくりかへすべき日は迫る時の刻みは止めむすべなみ

一月二十九日　雨ひねもす

雨烈し風さへそひて足あやうしそゞろにわれは老をおぼゆる

五十とせを歩きなれたるこの道も険しくいまはゆきがてぬかも

ひねもすの雨のわびしさ珈琲飲みドウナツ食してすごす一とき

買はむもの何もなけれど雨よけてデパートに入りエレベーターに乗る

掘出し市雨にもめげず人こめり見てまはりつゝ何も買はずも

波あらき丹後の海に漁りしてふ乾魚の籠がわれを待ち居り

まあたらしき人のなさけの香ににほふ乾魚やきて雨の音きく

遠き伊豫に離りて住める妹の文なつかしみよむ雨なほ止まず

傘の雫おとす音してたそがれをおとなひし人を妻の迎ふる

雨衣ぬぎて畳める老いしわが友を玄関の暗き灯は照らすなり

かしこまり火鉢にわれと向へどもそゝくさ友の常にかも似ぬ

東京へ住ぬと告げつゝ面伏せて長野十二星は泣きにけらずや

わが友がわれにさきだちうちつけに京を去るとはおもひかけきや

戦災にうらぶれて來し京にして君われを知りわれ君を知りぬ

君泣きて惜しめわれはた惜し別れ人の運命のはかなくもあるか

立つ日まで句会が三日もつゞくときく君を惜しむはわれのみならず

力なげ杖つきていぬうしろかげ小ぶりとなりし町に消えゆく

老　木

風雪に耐えこし老木尊しと誰が仰ぐ古葉掃きは掃きつゝ

一月三十日　　けふもまた

來るべき別れを告げてけふも亦植田あや子をさびしがらせぬ

父はあれ子は孫はあれ孤独なる思ひに耐えていく年か経し

その父は古き友なり今は亡しまさばと嘆くわれの別れに

一月三十一日　　日銀旧友会　　旧友ら

むらぎもの心のふるさとこほしみて友ら寄りくもあかるき日ざし

卓上の真あたらしき記念簿の才一号にわが名を署すも

久に見る友見ざりし友も睦びあひてたのしく語るいくつかの群

飲むもよし飲まぬもよしや酒の瓶よそに話のはずむなりけり

時迫り皆が起ちつゝ聲あげぬ日本銀行萬歳三たび

轟きの止まぬまにまた誰がいひそめしわがために上る萬歳の聲

來む春はあへぬわれとや惜しみけむ八十びとの聲涙もてきく

いのちあらば逢はむよ友の深なさけありがたしありがたし必ず生きむよ

二月一日　五条阪洛聚社

風流びとゝわれ見けむかも陶工のあるじがわれに茶をばすすめつ

到來の惜しみて保つときくものか宇治の玉露の香の味のよさ

茶を喫みつゝ楽の皿の焼くる待つたのしさわが筆染めしその楽の皿

喜寿記念にわが歌かきし楽の皿子らめづるよし賞でざるもよし

かへるさに下鴨の友おとづれぬ楽焼の皿大事にもちて

あわたゞしく來慌しくいにし友ときくストーブの火は未だもえつゝ

大阪にわかれて住みて年を経つ孫ら見まほりけふも來にけむ

元木三千代

ストーブを焚きつゝ別れゆくわれを泣きける父を語る人かも

日銀の新木前総裁みまかりぬと使ひ來りて告ぐと語るも

病やゝよしときゝしはよべなりし心うつろに君が死をきく

弔電の電文かきつゝ頼信紙におもかげしのび涙落せり

同車して奈良の古寺巡りしも昔となりぬ今きみは亡し

二月八日　わが喜寿を

われ祝ぐとはろばろと來し子ら孫ら生ける甲斐あるけふのよろこび

さかり住みて常あひがてぬ子らどちがわれを圍みてたのしげ語る

比叡仰ぐ蕪庵の古き雅びたる庭にさす陽ぬくしよき日和かも

老酒とふ名もよしや娘(こ)も乾杯すわがいや長の寿祈りて

いにしへに万里の長城こえて來し遠祖(おや)の裔の子われとわが子ら

遠き祖がめでけむ料理食し足らふけふの幸をば祝がざらめやも

父は楽し車つらねてかへり來し吾家に睦び語る子見れば

大　夜行にて帰京

皆いにてさびしくなりぬ一人のこる子も夜汽車にてかへりゆくなり

朝を來てその夜をかへる仕事が待つこの子をわれは祝福すべきか

二月九日　今日は雨

大阪の妹についてゆきし姉けふの雨をばいづこにきくやも

けふの雨きのふの空におもはめやわれをほぐとて春や歩みこし

和泉ぢを浜寺にゆき堺にゆき雨の夕べを千草戻りきぬ

見しことき〻しことを語り夜は更けぬ母と語るはいくとせぶりかも

二月十日　千草夜行にて帰京

一夜ねて母におくられかへりゆく子の幸祈る涙ぐみつ〻

土産のすぐきも重しふりはへて加茂に吾妹が買ひにゆきしも

二月十一日　生れ日

卓上に祝電二通置きてありモトキフビトとイノウエカツコ

わが生れ日よくおぼえゐて祝ぎくるゝ人のなさけのありがたいかも

吾妹子の炊きくれし赤飯もいとうまし二月十一日はわが誕生日

国旗も立たぬさびしさや紀元節復活運動ありときけども

二月十二日　われを知る人

洛南中原教論に偶会

蛸薬師河原町にてものいへる人ありわれを知りて親しげ

吾子の友と束の間おもひで誘はれて茶店に珈琲のみつゝ語る

新婚の妻伴ひしこの友と四条通に逢ひし夜もありき

歳月は経つゝみ子はや六歳(むつ)ときく若き父かもあはで久しき

泉涌寺の丘べに家も建てしといふ教員生活十年も安らに

わが短冊いまも大事にもつときく世に知るひとはなほありにけり

二月十四日　ナイフの音

阪急食堂特別室

こゝろあふ友と語れば雨の音も高層七階のこゝまできこえず

ナイフの音もしづかに語りあふ八人の友を照らす螢光灯

わが去るを心に持ちて言挙げせずエビのフライも楽しくを食す

つぎつぎに皿運び去りて卓上に飲みさしのビールいく瓶かあり

食べ足り飲み足りにけむ話なほ盡きねどナプキンさらばとはづす

遠くいぬわれを廊下におくりくれし友にも別れエレベーターに乗る

二月十五日　おとづれの聲

玄関に聲あり新村先生と耳遠きわれに妻のきて告ぐ

言語学のみ弟子にあらず歌好むわれとむすべる君の親しさ

借老の刀自のいまさぬさびしさを慰むべくも常訪はずゐし

老らくの健忘語れば仝感し八十四の君はうなづきましぬ

朝目ざめよべ床に成りし歌おもへど遂におもひでずと語りたまへる

枕べに鉛筆おきて寝まらくとおなじこと君も思ひたまへり

文化勲章に輝く君と杖つけるうしろ姿見れば翁さびます

み筆跡やゝに古びしわが標札見かへりつゝも君はいにます

かの友この友

西村悦蔵氏

縁側の籠の小鳥はほがらかに囀りやまず春陽をあびて

裁判官のいかめしさなく箒とりて庭掃く友もほがらかな午後

仏蘭西のウキスキーよとつぎにつぎわれをもてなす刀自も老います

入浴して十時には寝るといふ刀自と共に語りし宵なきもむべ

いなばわれも飼はむとぞおもふまたも啼く小鳥のこゑを庭の面にきゝ

髪白きあるじの友は言少く別れ去ぬべきわれを惜めり

尾崎久助氏

工学博士の友のアトリエ絵の具のみ空しく置かれて友の影見ず

建築設計の会社々長も家にあれば日ねもすカンバスに向へるものを

立てかけしいくつかの画よ日曜画家になどかも多きこれの裸体画

わが室にも君の画ありて朝夕にながめてしのぶ君のアトリエ

友の門の柳青みて下鴨の細き流れの音も春めく

二月十六日　けふも別れ

岩田ひで子

一

をちこちのバーに喫茶店に灯がとぼり西木屋町は夕ぐれにけり

女どち二人をつれて舞坂とふ鰻屋ののれんわれはくぐるも

オールドミスは隣りに妻と相向きて心安らに腰かけ居たり

蒲焼もうまきもうましと箸休めず食しつゝ居ればもの思ひもなし

女どち飯食せるまを酒を只つぎてつぎつゝわれは飲めるも

かゝる夜はまたあらざらむ灯の赤き町をゆきつゝ別れを思ふ

二月十七日　二

広崎挙吾

わが去るを惜しみて招く隣びといなみもかねつさびしかなしく

海の幸山の幸ゆたに家刀自こゝろつくしてもてなしたまふ

留守なりし主人もかへり十五年の交はりいひて酒つがすかな

ありがたしこの人もわれを町会長に選びし人かわれを知るひと

戦後をよそに先きたち主婦までも投票して町会長きめしこの町

移りきて一年まりわれを選びける町びとにそむきわれは去なむとす

酒ゆたに料理もゆたに今宵また飲み足り食し足り心も足らへる

よろめかず足つよく踏みてかへりぢにわが生ける幸妻に語れる

二月廿二日　丹後路

伊藤家をおとづる

嵯峨すぎぬ再び見ざらむ春と思へば丘に咲く梅を飽かずながむる

花見ずていく春すぎし京の山も去ぬ日を近みいと恋しきも

峡を狭み岩にせゝらぐ水青し岸べに匂ふしら梅の花

墜道またトンネルのいぶせさを忘れさす保津峡のこの流れはも

汽車おそし山また山の峡をゆくながめにも飽きて妻も語らず

港よと思ひしものを雑木のみの山にかこまる西舞鶴は

海のなき都より來て海を見つおゝ青き潮よる海を見つ

海水浴場の標示なつかし丹後由良夏をしのばす砂浜白く

やゝゆけば海岸せまく群岩に大波小波よりて砕くる

ま向ひて雲にたゞよへる崎ありて湖の如き宮津湾かも

ゆらゆらに舟に揺られて橋立へ友とゆきける日も遙かなる

まい來にしいにしへの日をかたりつゝ成相山を妻ながめ居り

大江山登山口の標ある山田駅にわれら迎えて待つ娘(こ)かなしも

いと古き汽車に乗りかへ終點の加悦(かや)につくまで語る親しさ

母も知れ娘(こ)も知れはろに未だ見ぬたらちねの父を見むとわが來し

雲のまの陽ざしぬくとしちりめんに名だたるこれの町のしづけさ

枝長く横にのびたるいと高き松をしるべに門くゞりたり

風呂立てゝはろに來しわれを人は待て出迎へし子にまたもあはぬかも

ひろき家のひろき二階にわれは寝つ軸も屏風も雅びて古き

朝おそく覚めて見下ろす町しづに自転車に乗りて稀に娘らゆく

患者絶えしまを白衣のあるじ朝食のわが食卓に來ては語るも

田舎びしこれの醫院ののどけさよ調剤室も薬のみ並び

大江山電波遮るかＮＨＫのテレビは見えずときゝにけるかも

海ちかき加悦も不漁に魚なしと乾魚饗えつ土産にくれぬ

二月二十六日　天　国　へ

沢野順三郎死す　二十八日葬儀

一

あゝ沢野逝きにけるかも十四年病みてこやりて遂に癒えずあはれ

新春に餅三つ食べぬと晴れやかにその娘はわれに書きけるものを

薄荷屋とふ古きのれんのつゞきたる船場のぼんちに生れ育ちし

六十年の友なり大阪商業学校の仝窓のわが古き友なり

性格も趣味も異なれおもひではなどかもわれに親しみ持ちて

寒鮒をふりはへもちてくれし友松茸山に招きける友

邦楽を好みし君は新町の吉田屋に喉をきかせし夜もあり

秘めごともわれには秘めである宵は秘めびとゝわれも仝浴せしも

あゝ沢野遂に逝きしか会堂に神父の祈りうつゝなにきく

安らかに眠れる君に花さゝぐ手は震えつゝ眼はうるみつゝ

ひつぎはやがてとざゝれ釘を打つ音天国へ導くごとも

山峡の火葬場へわれもついて來ぬ自動車おりる足もたゆげに

古き友親しき友も忘れはてこゝろうつろの中風症あはれ

描ける画を眺むる如く無心にて病める君が目われに向ひし

籠に飼はる小鳥にも若かず永き日を耐えて逝きけむ自由失ひ

君をやく烟やなびく宝塚の山々くもり寒き早春

三月八日

別れ惜しみて（一）

田口邸にてやすはる会

いとこどちわれの別れを惜しむとふうれしかなしきけふのつどひや

母系の血わけし子らなりはらからの親しみ持ちて語りけるかも

かなしさをまぎらはすべく三味ひきて謡へるひろ子も老いにけるかも

いさゝかはわれも酔ひけむ芝生青き庭にて撮りし記念写真よ

別れなむいざと皆立ち十四人螢の光歌ひけるかも

涙ためてわれも合唱すいやはての別れの曲はかなしきものを

曲はてゝみなが寄りきてわが握るおのおのゝ手のその暖かさ

五月十一日　　別れ惜しみて（二）

鷹ヶ峰然林房若水会

北山につらなる山のこの峯か桜ふゝみて春まだ早き

六十とせの仝窓うれしわれ惜しみいくたび飲めど惜しみ足らはず

然林房の大き湯槽（ぶね）に共に浴むこの一ときはおもふことなし

古き日のことを互みに語りあひ飲みつゝ酔へばこゝろ若やぐ

わが前に並びしいくつかの盃を催促されて友にかへすも

僧なりし還俗の友は言少し京に病む娘（こ）をときに思ふらし

道のへの光悦寺の門くゞりつゝ庭を歩けどお茶いたゞかず

言挙せね別れ惜しみてわが友ら風流も忘れ日暮らせりけふは

三月八日　別れ惜しみて（三）

阪急特別食堂にて旧友有志

心のふるさと日銀に育ちける友らかなしくわれを迎ふる

別るれば逢ふときもなき如くにも惜しめる友の幸祈るかな

この室にさきつ日あひし友なりきまたも逢ふともつきぬ名残りか

時來ぬと促されてオーバ着ぬビールの瓶は未だのこれど

最終の扉あけてエレベーターガール待てり別れむさらばさらば友らよ

うつくしくネオンの光かゞやける町の夜空をわが見たりけり

夜の町をゆかぬわれには珍らしも大阪の夜よ限りと思へば

三月十六日　別れ惜しみて（四）

古山未亡人静子

浪華よりはろに來し人うれしみてゆきて迎えぬ四条大宮

その夫のありし日よくも訪ねたる友なるわれに親しみし君

会食後とみに苦しみし友なりきその臨終をうつし目に見つ

友の中の友の一人と親しみしわれなほ生きて君を迎ふる

わが家に妻も待ち居ぬ大阪にあひてかたりていく年ぶりか

京を知る君と名残の花見むと誘ひてそゞろ祇園へゆくも

円山の桜つぼみて春早し遂に見ざらむ花惜しめども

惜しむ友とこの道ゆきてこの春は見ざらむ花の樹々眺めたり

平野家に芋ぼう食していにしへの京の風情をしのぶなりけり

吾妹子と肩を並べていにしへを恋ほしみ語る人も老にけり

まだ暮れぬ四条通りをそゞろゆき京友禅の店に足佇む

み子にゆくわれも子にゆく來む月は東京にて逢はむさらばの君よ

三月十四日　別れ惜しみて（五）

小西家晩餐会

十五年隣に住みてものいひし人と別れむとき近づきぬ

家族どち六人われをば圍みつゝ膳並べたり春の饗宴

さびしきか多く語らずわれもまたつがるゝままに只酒をのむ

老らくの涙もろきか血壓の高き主人もさかづき持たす

わが歌をあまりてさびしと言挙するみ子の教授もさびしかるらし

画を学ぶみ孫は黙つて箸とるも春のゆふべのさびしき印象

みどり濃き庭に小鳥よ来てを啼け別れの曲ときかましものを

夜ふかみぬ屏風を照らす灯の影も別れと思へば何かさびしき

三月二十日　小林邸にて白蓮女史とあふ

相知れどいまだも見ざるこの君を京にて見るもゑにしなりけり

不知火の筑紫の女王の若き日の歌こそしのべかなしきものを

若き日の情熱いまも秘むるがに君の白髪をうつくしと見ぬ

つつましく畫げすましてたちてゆくまたもあふ日を知らぬ君はも

四月二日　別れ惜しみて（六）

河野未亡人千鶴子

和泉より老らく君はわれと見む京は名残とはろに来ませり

渡月橋まなかひに長しバス下りてせゝらぐ音をきゝしたまゆら

嵐山へ町すぎてゆくこのバスの窓ゆ目かれず惜しみ見し君

おもはぬに桜さかりのあらし山木かげにつどひ人ら酒のむ

見ざらむとおもひし花を京に見つわれを惜しみて春早く来し

大堰川ゆるらにわれら乗せし舟漕ぎゆくなべに花咲きみだる

花かげの岸ゆく人もけふにあひてたのしむらしも足もそゞろに

足弱の腰抱かれて石段を一段一段君は登りし

先人のいさを知らぬげ大悲閣只足とめて過ぎゆくが多し

掛茶屋におうすの文字見ておうすとはお茶のことかと問答する若きら

山際の青き流れを見さけつゝお茶をいたゞく落花を浴びて

谿深しはやちりかゝるさくら花春陽うらゝに毛氈に映ゆ

われよりも花を惜しむや老刀自の目はうつろなり花見さけつゝ

向つ岸へ渡せる舟にちる花のいま下りてこし山見かへりて

花ふゞく小督の墓を手に撫でつ春のゆふべはかなしきものを

琴の音に馬を停めける仲国は松ふく風もかなしかりけむ

再建の金閣を見て疲れけむ刀自をかなしむ夜のつどゐに

別れ惜しみて（七）

いぬる日はやゝに近づく君倶してけふもゆかむよ京の町京の山

都をどりのポスター目に顕ちゆくひととなまめきて見ゆ花見小路は

この春を名残と思へば都踊りの祇園囃子もいやなつかしき

また見ざらむこれの踊りよわれを知る舞妓もあらば言問はましを

きだはしを上りて仰ぐ祇園のやみ社のべに咲き咲くさくら

円山もいまさかりなり花かげの鯉浮く池に映ゆるさくらや

知恩院の花の木かげをいゆきつゝ散る花びらに別れ惜しめり

四月六日　別れ惜しみて（八）

広崎氏夫妻を招く

妻病めば留守には晩菜くれにける人をおもへば心温まる

ながき日を足らひて安きわれなりき人のなさけに生きしわれなりき

自炊できぬわれとし知りて心こもる晩菜くれしもおもひ出にして

いよいよに別れの惜しくいとせめて心やらむと招きし夕

つげば君につがるゝ酒かなしくつろぎて飲めど飲めども酔ひ足らはぬも

手作りの妻の料理も賞でたまふ別れ忘れて常の日のごと

わがいぬは外つ国ならぬうつそみのいのちしあらばまたも逢はまくに

かへりゆく四つの足音門すぎぬなつかしくきくその足音を

四月九日　別れ惜しみて（九）

元木文人氏家族らと洛北蕪庵

わが喜寿を祝ぎし蕪庵に卓囲めば一族の如きこゝちするかも

われにやゝおくれて京に移りこし元木文人は大阪の友

若くして学位をとりし一人子も三人の父となりて年経し

老い若き男女がくつろぎて老酒を酌みて乾盃するも

いつのまか中華料理の皿殖えて話ははづむ洛北の宵

別れ惜しむつどゐしるせしわがメモも今宵につきぬ去ぬ日ちかづく

惜む人よりも惜しまるゝわがさびしさを語るすべなみ別れけるかも

別れつゝなほも惜しみて君が家の応接室にお茶すゝりしか

別れ惜しみて（十）

桂信子より銘酒菊正宗を贈られて

よき人のたびしうま酒このゆふべ飲みてうたひて酔はざらめやも

いにしへに酒を讃えし歌びとの歌おもひつゝ飲むもうま酒

老らくの萎えし心を励ましてうたおもはする酔ひごゝろかも

よき人のたびしうま酒よき人を思ひて飲めばいやうましもよ

海の幸山の幸足る国に住みて吾を酔ひ足らすこれのうま酒

うまし酒三つき五杯酔ひ足りて早寝を欲りぬわれも老いつゝ

遠人を恋ひつゝけふも日暮れぬうさ忘れまくいざ飲まな酔はな

右七首は伊勢に移りて後詠める歌なり

四月十六日　京を去る

いよいよに京を去るべき日となりぬしとゞにふりて雨やまずけり

雲なべて空を掩ひてわれ惜しむ涙と降るか心暗しも

ゐ並びて門に見おくるひとかなし涙をためて別れをいふも

笠かけしうらぶれ人の如くにも落花をふみて京を去りゆく

終の住家

見なれたるこれの伊勢ぢも旅ならで終の住家と思へば親しき

タクシーのわれらをのせてゆくなべに山田の町は雨にぬれ居る

ほゝ笑みてわれを迎えぬ桜花いせぢの春はあたたかきかも

子孫らと仝じ食卓圍みつゝ旅ぢの果の安けさに居り

四月十七日　空晴れて

東宮行啓　十六時山田駅御着

皇太子迎えて花火あがるなり空晴れわたりよき日和かも

荷物ほどく手をば休めて御安着遙かに祝ぐもわれも伊勢びと

伊勢の夜をはじめて五十鈴の川の音杉ふく風の聲きかすらむ

わがうから佐久間玲子も仕へ奉る斎館の夜は靜かにふけよ

四月十八日　両宮参拝奈良へ

遠つみ祖に御成婚告ぐらく日のみ子が参らす朝はよく晴れにけり

絡繹といゆく人らについてゆく外宮をさしてこの朝われも

立入禁止の参道は白妙の砂も清らにみ車を待つ

並杉の木かげに群るゝ大み民に押されてわれも立ちて久しき

騒音の止みしたまゆらまなかひをみ車ははやすぎゆきにけり

窓越しに皇子御妃をほのに見し束のますぎしみ車の音

老らくの気短しみかへり待ちもあえず高倉山を畏み仰ぐ

天つ日のみ子とあふがず親しさの心をもちて迎ふらし庶民は

大み前に（一）

四月廿四日　外宮へ　　廿八日　内宮へ

幼な孫の手ひきてまゐるこの道は皇太子の踏ましゝ砂も清らに

み食つ神鎮まりいます外つ宮に感謝の手拍つ食足るけふを

大前にむれに並びて遠つ国の團体ならし虔しみ拝めり

前つ池に泳ぐ緋鯉を見て遊ぶ幼なごゝろになりたきものを

兵隊がみな絞めしとふ戦後には見ざりし鶏が群れて餌を食む

近づけど人に怖れず餌をあさる白き庭鳥は舞楽殿の庭にも

移りきて初めて詣る宮におもふいくさきびしきすぎし日のこと

篝たかぬ夜の闇ゆきてひたごゝろねぎまゐらせし大み民われは

大み前に（二）

観光バス何台も駐まる宇治橋のほとりにわれも下りて歩くも

み沓跡おひて白砂ふみてゆく参宮道の杉のすがしさ

み立たしゝきのふの如く五十鈴川瀬の音清みわれはみそぐも

六とせ前遷宮の夜を畏みてわが坐りゐしむら杉かげや

しづしづと供奉の宮びと闇をゆくけはひのみして物の音なかりし

きだはしの一段一段ふみしめて仰ぐみ社の清さ尊さ

みちにあひし長き長き列の小中学生は神のみ前に何祈りけむ

われらのみに大御前に人なし膝つきて遠つみ祖をうつゝに拝む

いく日も経ぬに

漁るべき古本屋もなき町に住めば遠き都のなつかしきかも

鄙びとに果てむわが身は惜しまねどかたる友なきけふのさびしさ

ふるさとゝ思ひたがえてわが安さ羨しむ遠き友の文々

散歩の杖いつも仝じ道に飽きにけりわが人生も倦みにけるかも

わが墓場こゝにと決めしわがこゝろいまはすべなしよろげるものを

雑音の中にもはげしき呼吸(いき)ありき煤煙にも燃ゆるわが血通ひて

極楽の安き望まずもゆる火の地獄を欲りし死後のわれなりき

うつり来ていく日も経ぬに安逸の苦痛をなげく歌多く詠む

五月三日　五十年忌

河内葛井寺にて田中甚城五十回忌

亡妻(つま)をわが知らざりし日に逝きし父五十とせけふをみ霊に向ふ

弟妹(はらから)と珠数つまぐれば亡き妻のおもかげに顕つかなしきものを

よばひて短き命なりし亡き妻もわれに隣りて経きくらむか

明石潟に消えける姉のまだとつがぬ子が寄り来り来つゝものいふかなしさ

無軌道に結びしわれら父まさば鞭うちまさむ当時(とき)なりしかも

みな異母の弟妹(はらから)はまだ若かりし名あげてけふはみ魂まつれる

父の血は正しく吾子に流れたりその血を守りてわれもけふ生く

淡路のや賀集の御墓年経ともよきみ子孫ら永久に掃はむ

吾子と共に

その夜咲耶方に宿る

子孫らの住むなべわれのふるさとよ安らかに寝むわれの寝所よ

高校に新入学の兄孫はやゝ大人びてテレビ見つむる

椅子に倚るわれに野球のラヂオきく弟孫時に聲あぐるなり

遠く来て老らく父は疲れけむ早いねませとやさし子のいふ

湯に入りてくつろぎ子らと語らへどテレビに宵の更けぬまをいざ

婿の父はわが友なり

この室にいく夜か宿り尾崎咢堂の書の額見れば亡き友おもほゆ

和泉野はしづかなりけりうつゝにし一人ぬる夜はふけてゆくらし

こゝろよきねざめの朝を梭の音隣の工場ゆまだきにきこゆ

庭鳥をあまた飼ひつゝ生む卵朝々数へて楽しむらし娘(こ)は

裏庭はひろし草生を耕して作る畑に青き菜のいろ

中に生れこれの田舎に年を経し子はのどかなりよき夫(つま)もちて

見おくりてバスにわれのせ手を振りぬさらばの吾子よまた逢はまくに

白百合

一すぢは晴れてさやけしひたすらに君がいまゆく柴のみち

いつまでも清きほこりをもちて咲け摘まむに惜しき白百合の花

言にいはずやさしく待てる君なりき別れて逢はねばなどかこひしき

わが座右にいつも掛けたるうまし画に今橋久子のおもかげに見ゆ

われの手の冷たき如くこゝろさへひえたるわれと人やおもはむ

若みどり樹々いま崩ゆる死火山の底にもゆる火ひと知るらめや

五月四日　京都の二夜

ふるさとにかへりこしごと京都駅おりれば心はづむなりけり

見はるかす山川さやにまなかひの建物街路樹もみな親しもよ

手をあげむばかりによろこびわれ迎ふ家々の人はわれを知るひと

わが鞄もちて家刀自に送らるゝ見馴れし町もなどかさびしき

おもはぬに自動車にて追ひかけ來し人よ安也子敏恵もかなしき人かも

手を握り左様ならして動く汽車にいつまでも手ふる愛しき人ら

京去りて二十日のけふを十とせ見ぬ人の如くにわれも恋ほしゑ

一つ室に枕並べてわがいねつこゝろ置かねばわが家の如し

家あるじ麻雀あそぶ牌の音きゝつゝ安く次の夜も寝し

知らぬ名の標札見ればほのぼのとわが住みし家に郷愁おぼゆ

われ惜しみさびしみ泣きしとなり人心にかけてよべは訪ねし

去にし直後血圧とみに高まりて倒れしときくかなしきろかも

救急車に人事不省のまゝ運ばれてなほ入院中の老らくあはれ

まだ心打つを恐れてみまくらべに見舞の言葉述べぬ本意なさ

夕また雨となりけり傘借りて町をゆきしも思ひ出にして

いつも遅き主人も起きて朝の食を共に箸とる別れの朝かも

四月三十日　鳥羽と二見

生けるまにわれは遊びて海の国伊勢志摩めぐり海女も見て來む

ところどころ苗代青し山峡の田の面にまばら人ら耕す

雑木のみの山脉つきて海の見ゆ潮の青き鳥羽の海見ゆ

土産物屋宿屋の並ぶ海の町鳥羽をわがゆく旅のこゝろに

島めぐりの船が客待つ桟橋に波にゆれゆれ三艘五艘

波ゆらにガイドが語る島と崎名も覚えずろまた島と崎

おそ春の海の風ふく甲板に妻と並びて鳥羽見かへるも

養殖の真珠筏を波はろに見放けてわれの舟はすぎゆく

若葉茂る丘まなかひにゆらゆらとイルカの島に船つながれぬ

すぎし日の水禍に逃げてイルカ居ず放して飼へり山猿のむれ

丘のみち上りてみさくる海青し島かげをゆく白き船も見ゆ

丘おりて磯べをゆけば桶ゆらぎうかびし海女は口笛を吹く

また潜る海女の足白し桶のみが波の上に浮きてゆらぎて居るも

びつたりとぬれし肌着の身につきて浮び上りし海女うつくしき

桶に入れしは何の獲物ぞ五体透く濡れ身の海女は汀に立てり

かへり船腰かけて待つわが膝に山猿親しげ乗りて座れり

パンの片投げて与へしおぼえゐけむまつ人多き中のわれをば

暫くに膝下りければ山猿の足によごれし泥掃ふなり

泥掃ふわが背の重しみかへればわが肩抱くまたの猿はも

台湾猿と案内に書けり毛物さへなじめばわれも愛しきものを

五月二十日

二見浦へ

車窓よりむれ山にぬきんでゝ朝熊山みどりいろ濃く聳えたり見ゆ

いにしへにその頂きゆ海はろに知多半島をながめしおもひづ

雨の後の海は濁りて二見浦渚もなしに潮みち満てり

貝拾ふすべなみ岸べゆくわれに初夏の風さやかに吹くも

夫婦岩かそかに注連がゆれて居り若きが妻の写真撮る見ゆ

はしやげる修学旅行生をよけて歩く大き岩背にこの道細し

焼さゞゑうましと食ぶる妻のへに歯わろきわれはジュースのみ飲む

われらのみの乗合馬車をよろこびて孫は蹄の音めづらしむ（帰途）

宮川をゆく

草むらに咲ける紫雲英をいとほしみ孫つめばわれも摘みにけるかも

土手長し人のゆかねばあざみ草刺多み折らまく折れぬ惜しさよ

宮川の流れを広み瀬につなぐ砂取舟の小さく見ゆる

水際におりて釣する人を見て土手の草生に足佇めにけり

流るゝ浮標見つむるまみの真剣さ引き揚げてまた投ぐるいくたび

上げし竿の針に躍る小魚は鮎ならしびくに放りこみまた針投ぐる

音もなく流るゝ川のみなかみの橋をバスゆくひるのしづけさ

いと長き度会橋のおばしまに流れを見つゝ時すぎにけり

五月廿五日　東　京　へ

伊勢号にて上京
山本母と嫁にバスまで見送られ山田駅には
建夫妻、順、恵子、山本幸子に見送られたり

東京へ東京へとこゝろ走せ居りしその日となりて妻と出で立つ

暫くは見さらむ孫ら父母につれられて手ふる山田駅のホーム

鳥羽まで座席をとりにゆきくれし幸子も手振る動ける窓に

うば玉の闇の国原すぎてゆく汽車に語るとも睡るともなく

静岡に買ひし鯛飯うまかりし印象のみのこして一路汽車ゆく

海見ゆ青き海見ゆ大船をすぎて未明の青き海見ゆ

雑木若葉の山もよけれど海こひし貝になりたき願ひはわれも

東京は近づきぬらし高層の建築物が手ひろげて建つ

六時四十六分東京駅着　駅頭に大、悠紀子
陽生出迎へくれぬ
仝車して渋谷の大の居に向ふ

や、やと手をとりあひぬうからどち汽車の停まりしそのたまゆらに

荷物はみな持ちくれぬ手ぶらにて階段下りる足の軽さよ

駅出づる即ち雑沓が待ち居たり車に群れてわが車ゆく

目まぐるしく東京の街は大工場の機械の如く動いて居るも

二重橋青葉の奥に老らくのわれはかしこくながめてすぎぬ

み濠に鯉は泳ぐやいにしへの如くにいまもせまく住みつゝ

出勤にまだ早き朝はしかすがに静かなりけり渋谷の町も

みどり樹の丘の麓の白き家吾子のすまゐの扉をひらく

五月二十六日　うからどち（一）

悠紀子、陽生いにし夕、克己、千草来る

女どち久にしあへば全車して語りつ話題つきぬげなほも

吾子の家はわが家とこゝろ落ちつきてこもごもわれもかたるたのしさ

はろに来しわれをよろこびふりはへてわがうからどち集ひてくるも

おもひゝ見ざりし吾子を久に見つすこやけき吾子をいまのうつゝに

詩人とシネマライターの吾子どちが常あひがてにあひにけるかも

家売れて明けねばならぬなやみいふ陽生かなしも珈琲のみつゝ

千草きておなじなやみをくりかへしかたるをきけばうらかなしもよ

恵まれぬこのうからかもいとせめて慶大に入学せし孫を祝ぐべき

うからどち（二）

二十七日　悠紀子仝道、天沼に柏井氏を訪ぬ
数男君は悠紀子の弟にて歯科医

新宿駅のホームに一足おくれつきし悠紀子迎えてまたバスに乗る

天沼に遂に果てける幼な友この子らの母をわがしのぶなり

えにしありて子ら結ばむと思はずろいつも宿かりし天沼の家

治療に来て饗にあはむと思ひきや渇ける咽喉にビールのうまき

入歯すと職業なれば手術台に醜きわれの口あけさすも

七十年わが食噛ませしおのが歯は一本もなき口の空しさ

悠紀子に別れて世田谷に民子を訪れる

わが書きし標札はあれ弟のありし日しのぶ面影もなし

未亡人の嘆き忘れて家守ると生活力つよく麺麭を売るなり

パン買ひて腰かけ或は立ちて食す高校生にこの店せまき

十円二十円とみな少額の客こみてたつきのためと嫁も働けり

終業のベル鳴りしたまゆらに校門を出づる学生のむれはつゞくも

パン入れし大き重き箱抱えて嫁はゆく夜学生のため開く食堂さして

いろいろにパン並べつゝ立ちて見るわれになげかずよきこの嫁や

立ちつ坐りつ忙しきあきなひ見つゝ語るひまなし民子も立ちつ坐りつ

わが前に並べられし丼は鰻飯ひるは天沼に江戸鮨食せし

客いにてビールつぎつゝ白蓮を語る民子も歌びとにして

いさゝかは妻もビールに酔ひ足りぬ庭のもに咲く泰山木の花

五月二十八日

旧　友（一）

日録旧友会室

いつも寄るわれかの如く来あはせし友ら親しげものいへるかも

わが椅子に並びてものいふ友の名を忘れてのちに人にきくかも

友らみな長く生けるよ名札見ればわれより老いし友四十三人

老らくのいとさびしきは先きたちて逝く友多しとなげきしものを

知る知らぬこゝに来寄ればみなおなじふるさと人よ言も親しく

本館へゆかむと階段おりてゆく旧友バッジをわが胸につけて

母行にはわれらのあとをつぎつぎて見まくの欲しき若き友多し

妻病む

かへりくれば総繃帯して頭しろき妻が待ち居り吾子留守の家

白髪染にかぶれてかゆさ訴えし歳月既に久しきものを

京に伊勢にくすし何なげ注射しつ薬を塗りて日をぞ経にける

手おくれよ毛根すべてぬけむとぞ醫師のりけると妻の語れる

あなみにく頸も繃帯に巻かれける妻をかなしみ夕げを食すも

洗面も入浴もかたく禁められしこの苦しきに若くものぞなき

瓦斯風呂にきのふは朝夕たのしみし風呂好きの妻のかこつをきけば

おくられて自動車に妻が往復する代々木八幡の醫院は遠し

五月三十日

旧　友（二）

中野ほととぎすにて竹沢正武君と会食

玉川、井の頭、東横と乗場多しまごつく渋谷駅の国電も二階

地下鉄は三階と教えられいぶかしみまた階段上る足のたしかさ

電車つけば一人一人が列のまゝしづかに乗りてこめりともなし

横合よりうしろより人を押しのけて乗車の風景大阪に見しを

地下道を走る電車の駅名を心にかくるわれは旅びと

地下鉄は銀座京橋はやすぎぬ町の雑音こゝにきこえず

三越前とよばれ下りてきのふの道けふも歩きぬ日本銀行さして

別館の旧友会室にはきのふ見ぬ人のき居りてものいひかくる

やといひて電話にて打合せし竹沢うぢ入り来てわれの手を握るなり

どこへゆくかあなたまかせについて歩く電車にも乗せられおりしは中野

ほとゝぎすとふ名も雅びたる門入れば旗亭ともなく庭ひろびろし

五月風吹きのさやけき二階にて支那茶のみつゝ胸くつろげぬ

おばしまにひろびろし庭見さくれば芝生に映えてカンナの赤き

つがれたる盃置きて相かたる旧友の消息その他いろいろ

友のためと心をこめて編輯する日の友もまた話題となりぬ

わが酔ひて忘れしならねほとゝぎすと染めし手巾がいまのこるのみ

上方に知られぬ味といにしとし根岸の湯豆腐あえしもこの君

数々の料理おぼえずうましとて皆箸つけしわが喰ひ意地よ

乗車券まで買ひくれて別れゆきし友竹沢うじはまた文の友

いにしへに住みていま亡き先輩の山本高野を中野をしのぶ

五月二十九日　うからどち（三）

青木家を訪ね千草を仝伴寺崎家へ行く

夜千草美姿子を伴ひて来る

ゆきつ戻りつ下高井戸のこの町をたづねあぐみし吾子の家かも

こぞもこしを地図までかいてくれしものわが老らくの健忘なげく

みな留守に錠をおろして吉祥寺へ吾子に案内されわが行かむとす

己が友にてまたうからなるこのあるじ社用にて在らずこの家も古りぬ

わが友ののこせし人は吾子の義母（はは）病弱此家（ここ）のみ子に頼ります

東宮女官佐久間玲子は刀自の孫若き寡婦にてこの家に住みし

新聞雑誌に見ざりし写真むつまじきおん姿などアルバムに見つ

玲子の寝どころこゝと狭き室の刀自の寝床のかたへ指します

京都にて葵小学校に通ひける少(わか)き日かたりし日もふりにけり(玲子回顧)

けふあひて別れし吾子はおもはぬにはしきわが孫つれて夜をきぬ

社会人となりて働くこの孫は相見ざるまにおとなびて居り

われ送りて東京駅にこぞの夜を別れしこのかた久に見ざりし

五月三十一日　五　月　盡

井上病院にてまち合せ克己方へ行く

井上醫院に妻の治療を待つま長し次ぎの番まつ患者と並び

皮膚科室のドアのカーテン動くなべ人の足音気にしてわが居り

看護婦が次の患者の名をよばふまもなく妻がドアひらきけり

繃帯の頭あはれとながむれど醜しとおもはず今は見なれて

○

未だ見ぬ孫ら見まくとバス電車都の北の王子は遠し

ごみごみと建てつむ町の吾子の家小川の橋を渡りわがゆく

二室のみのごたごた本を積みたればいよいよ狭き吾子の家かも

いにし日に子も嫁も見つ日曜なれば幼女の孫も家居して居り

孫どちの学ぶを見れば室隅に机と書棚兼ねし荒箱

言挙せずまづしさに耐えて詩はやめず税金は妻に心配させて

帰途駒込に井川君を訪ね伴ひてかへる

見おぼえの道をゆきつゝいく曲り君がアパートへ妻をみちびく

暫く見ざりし室を見直しぬ新しき箪司も据ゑられてあり

み母遠き君は吾嬬を母のごと京にある日は親しみたりし

われは黙に君は吾妹と語り草つきねばおくりて渋谷にぞ来し

送りきてかへりぢ暗し靴の音消ゆるまでわれは心にかけつ

この日大の戯曲集「女優の死」の出版記念会

夜おそく花環を抱きてかへりこし吾子のほまれを祝福せんか

この日祝ぎて六放局より贈られし六つの花環のこれはも一つ

一すぢにおのが道ゆくこの子若しいのちにかけて親は守らむ

末つ子に生れしこの子はたらちねの親に負ふこと少きものを

集ひける六十余名の記念簿に内村直也の名も署してあり

芸術のいのちは長し吾子若し只ひたすらに生きよとぞ祈る

やゝに名の知られし吾子をおもひつゝ吾子のいねたる真夜を覚め居り

六月一日　うからどち

柏井歯科医院へ

わが入歯成る日よ妻と天沼へバスおりてけふは道を迷はず

われらまちて姉の俊子も来てを居り子を嫁がせしことも語れる

となりの庭見おろして二階はしづかなり女どちの話ビールのみてきく

客いにしとよばれておりる待合室の卓上ににほふ一輪の花

わが歯ぐきに入歯をはめて白衣きし数男は上歯とかみあはせといふ

治療室の椅子にあふむき口あくる醜きわれをわれはおもへり

四日には仕あぐるとき〻元の入歯はめて別れぬ門の紫陽花

のこりし歯もぬけて空しく借り歯にてわが残んの世ものを噛むなり

陽生来る

いとこ会われ迎へまくみなの寄るよき日をなみに陽生はなげく

大阪にわがいとこども相よるに因みてこゝの二世が結べる

駒場のや教養学部にこぞあひしわがうからどちわれも見たきを

六月の一日も暮れぬ何が待つ明日わが待つことの多かり

六月二日　旧　友（三）

中根大人を青山に訪ふ

ま向ひて語れどおぼろにわが顔の見ゆとのらせる君のわびしさ

五官の不自由さこそとおもへども目の大事さを君に知りしか

逢へば先づ詠ましゝ歌の数々を誦しましにける常にかも似ぬ

みづからによみもかきもえぬ日の長さうばたまの夜のつゞくかなしさ

失明に近しとのらしけるもうべとぼ〳〵廊下あるきますはや

うからどち（五）

丸山信君を訪ね照代夫人と語る

わがために婿がつばらに書いてくれし地図を手にあの町この町ゆくも

ゆきて曲り曲りてゆきてゆきくれぬ町見当らずほとほと疲れて

ゆきずりのひとに地図見せわが問へどこゝらにそんな町なしといへるかも

次の駅まで遂に歩きて赤ランプの交番の前にわが佇ちにけり

丸山長官ときけばそこですよとねもごろに巡査はわれを導きくるゝ

わが頼む地図は一駅まちがえて書けりと知りて悔めどすべなし

自動車の入らぬ小路もおのが家と久にしづかに花作り住む

北白川いまも清らに流るれど君住みし日ははろかになりぬ

小学生の幼なかりしみ子もおよすげて東大に入りぬ浪人もせず

われもゆき君も訪ひきしおもひでをみ子に語るもあはで久しき

地球物理学を研めむといふみ子のよしおやのゆかぬみちゆかむもよしや

妹は数学よといふおのがみちゆく子もゆかす親も羨しろ

わが婿の末の妹としたしもよ丸山照代はわれを小父とよぶ

酒器もよし酒よし足らへる生活をまのあたり見てわれも足らへり

都立大の驛ちかし照代と歩きつゝ本郷町はたそがれむとす

六月三日　江戸川越えて

市川市に北村隆廣夫婦を訪ぬる

安らかによきくらしもつ若き世代の二人を見まく遙々に来し

華族の子と生れ母を失ひしかなしき運命の敏恵は妻よ

母はあれ父なく祖母つ子に育ちける隆広と結ばれしも奇しきゑにしか

胸病みて療養生活いく月に退院しても禁酒誓へり

新しきこれのすまゐに幸多き若き二人の世は創まれり

すぎし日に京都にて見しみどり児もすくすくのびて家ほがらかに

おりたちて庭の芝生に撮りにける写真に隆広はみづ児抱ける

黄昏の町ゆき自動車よびとめぬ驛まで見おくりくるゝとおもひし

驛すぎて江戸川こえてひたすらに自動車は走る野越え町すぎ

はろばろしこゝは渋谷の吾子の家再会ちぎりて君は扉を開く

左様ならと幸福さうにかへりゆく若き二人にわれら手を挙ぐ

旧　友（四）

アジア会館　会者高坂、三宅、平井、前田

アジア会館と名もいかめしきこの室の絨氈赤し多く踏まれず

見はるかす大東京のビルの果て青空の下に東京タワーも見ゆ

友の中の友とつどひてわれを待つわれより若き古き友どち

若き日にふるさとならぬ大阪に机並べてペンとりし友

職もちておのおの働くこの友ら自適のわれを何とおもふらむ

いのちありてことしも逢ひぬ年のはに東京に來て相かたる幸

「きさらぎ」より

外出の時の外洋服着ずなりて机に向へば膝のくつろぐ

一瞬に大洋の水涸れはてゝ海底に黄金(きん)を探ると夢む

捨てどなきわが老残の無価値なるいのちはかなし芥にもしかず

己がいのち短き知らに秋の蠅醜くゝむれて残飯食むも

絶食の三日すぎてなほ老らくの胃が痛む夜をこほろぎの啼く

（きさらぎ第一四六号　昭和三十四年九月）

たちまちにものの崩るゝ音砕くる音を闇夜にきゝてうつゝともなし

道もせに瓦礫うづたかし台風のすぎしあしたの秋の日照りに

水漬きたる家に手あげて救援の握飯をば待つといはずや

人生のわが夕暮を忘れては匂へる園に夢の華摘む

わが墓標自ら刻む如くにも刺戟なき日はけふもつゞけり

（きさらぎ第一四七号　昭和三十四年十月）

玄関に聲あり新村先生と耳遠きわれに妻の来て告ぐ

老らくの健忘語れば仝感し八十四の君はうなづきましぬ

朝目さめ夜床に成りし歌思へど遂におもひでずと語らせるかも

枕べにノートを置きてねまらくと仝じこと君もおもひたまへり

はなむけに扉書きして廣辞苑たびける君もいまは遠びと

（きさらぎ第一四八号　昭和三十四年十一月）

掃き溜めし落葉を庭の隅に焚き老らく無為の冬の日暮れぬ

クリスマス孫へのプレゼント撰り惑う妻と百貨店の人ごみに交れり

いにしへの柳忘れて縦横に光交錯す夜の銀座ゆく

放浪の旅はいづこに果つるらむ幾山河を越え去り来つゝ

老と老語ればわびし味気なし自ら墓穴掘るが如くに

（きさらぎ第一四九号　昭和三十四年十二月）

クリスマスイブに賑ふ銀座をばはろに思ひてテレビ見てをり

たのしげに聖きこの夜を歌ひつゝ踊れる若き子らの淡しさ

そゝくさと道ゆく人あり立ちどまりもの買ふ人に年暮れむとす

デパートの衣料品売る売り子らの和服が目立ち年暮れむとす

初神楽伊勢ぢにきかで放浪の旅路に吾子と屠蘇くみにけり

（きさらぎ第一五〇号　昭和三十五年一月）

初詣の破魔矢を持ちて来し孫もわれをかこみて年祝げるかも

新春も二月となりぬ落葉掃く妻とながむる空の明るさ

いにしへの健やけき君おもひ出てわれもさびしくいたづらに老ゆ（病友に）

刺激なきわが朝夕は餌の足れる籠の小鳥の自由なきごと

わが日記空白の日の多くなれり無事は吉き日よ食べて飲み足り

（きさらぎ第一五一号　昭和三十五年二月）

椿咲くアンコの島へ吾子のせて波ゆらゆらに船はゆくらむ

暗き海のはたてに夜をいろどれる燈台の灯を吾子や見かへる

ひな祭る女孫ら遠し老妻はひとりさびしく白酒を酌む

めでゝ見む君なき春を惜しみつゝ遺愛の梅は咲きにけるかも

かなしくも春を忘れで庭の面にことしも咲けりしら梅の花

（きさらぎ第一五二号　昭和三十五年三月）

せせらぎの音にまぎれて河鹿なく流れに映ゆる櫻の白し（箱根湯本）

旅びとの如きさびしさ人にいはねわが待つひとのけふも顔見ず

うすけれどなほ髪黒し刈り終へて心すがしく鏡に向ふ

旅ぢのはていづこと知らねけふもまた大地をしかと踏みしめてゆく

次ぎつぎにおとなひくるる人ありて世に忘られしいのち生くるも

（きさらぎ第一五三号　昭和三十五年四月）

老われは春や昔のひと恋ひて花の木かげに山家集よむ

（西行法師七百七十回忌）

おそ櫻も早散りそめぬ花かげをゆく君見たしちりはてぬまに

（入院中のひとに）

雨にぬれていよいよ紅きつゝじ見つゝ病む友もひてけふも暮るゝか

幸福とおもへどさびしわが余生たゞ食べて寝るそれだけのこと

日日是休日の日の永さ灰皿にたまりし灰をまた捨つ

（きさらぎ第一五四号　昭和三十五年五月）

梅雨暑し團扇放たで寝ますらむ君を思ひてわれも肌拭く

墓地掃きて夏草に交る一もとのあざみの花はぬきがてぬかも

梅雨にぬれて牛耕せり苗代の苗を束ぬる女もありて

提灯下げし納涼舟ゆくふるさとの水の都をしのぶ夏来ぬ

放浪の旅のねざめにうつゝなくこゝはいづこと闇を見つむる

（きさらぎ第一五六号　昭和三十五年七月）

ひる寝しに来ませと招くうからうれし酒もありますと言添へにつゝ

かにかくに無為の日永さ梅雨晴を庭に下り立ち草ぬきて居り

青すだれ朝は涼しき垣の根におしろいの花咲きにけるかも

寄生虫の如きみじめさ太陽の光の外に生くるわびしさ

豪徳寺に陶の招き猫を求めて

招き猫誰れやも招く待つ人を早も招けとたのしみて待つ

（きさらぎ第一五七号　昭和三十五年八月）

海こひし海のやかたの窓あけてものいひし人忘らえなくに

海こひしビルの谷間に青き空仰げば波の音きこゆがに

海こひし志摩の的矢の君が窓に汽笛をききし日も古りにけり

若きらの天国かもよ放埒の恥なげ群れて遊ぶ海の子

ボート漕ぎヨット浮べて女孫らも危しけふも海にあそべる

（きさらぎ第一五八号　昭和三十五年九月）

雪早き越ぢに菊の花の味君とめでむ日おもひたのしむ（新潟の友に二首）

鍋茶屋はありやなしや知らね待つ君と砂丘ゆかむ佐渡も見てこむ

神無月七日はかなしコスモスは昔ながらに花咲くものを（亡妻の忌日）

おもひつゝきのふは過ぎぬけふもまた暮れゆく樹々の梢ながめて

三十とせに逢ひてなつかし昔知る誰れ彼れ話題に秋の日くれぬ（昭和の尉と姥）

（きさらぎ第一五九号　昭和三十五年十月）

秋深くなりにけるかも街路樹の葉はも黄ばみて早散りにつゝ

武蔵野も木立乏しくなりにけり都心に遠く家建ちこめて

菊活けて天長節を祝ぎにける明治も遠き世となりにけり

君が代の歌も知らざる少年ら門閉ぢし校庭にボール遊べる

雑草もなほかついのち惜しむなり愛国はよし言に争へ

（きさらぎ第一六〇号　昭和三十五年十一月）

肩を寒みマフラして掃く庭の面の槇の落葉は土に凍て居り

人ごみの師走の街をやもめらし買物籠さげてとみかうみ行く

忙しげ人ら急げどこもりゐのわれには永き師走の日かな

総選挙すみて静けき町角に候補者のビラなほ剝がれずも

宝くじ百万円の夢ならぬ風流夢譚かきしは日本人か

（きさらぎ第一六一号　昭和三十五年十二月）

神話なりともよしや日本のあけぼのと仰げる今日はまたわが生(あ)れ日

杉林の奥の社に翁さぶる祝詞の聲が山に木玉す

笏もたむ御札も売らむとわが老後を思ひし日ありき安かりし世や

雛祭る女の子はなしに妹とわれ老のすさびに白酒を酌む

おばあちやま今年古稀つて何あにとぞ春よ來い來い歌ひし孫がきく

（きさらぎ第一六四号　昭和三十六年三月）

球根も芽ぐみそめけむ日あたりの土割れ目立ち庭は春めく

硝子戸あけて日南にもの縫う老妻に庭の丁子がほのかに匂ふ

亡き祖父の社長を襲がむ一人孫卒業と就職のよろこび告げこし

無法者はびこる世なり老らくの危険信号はいつも身近に（新村出博士輪禍）

女のみにすべなし身一つ逃れむとせまるほのほをおのゝき見つむる（深夜近火）

（きさらぎ第一六五号　昭和三十六年五月）

鯉幟尾振るを見れば五月風さやに吹くらしいねつゝ仰ぐ

竿かけて乾ものすらし老妻は雲のゆくへをながめてぞ佇つ

倦怠と無為の日つゞけば老衰が覆面ぬぎてわれに迫れり

わが魂のゆくへも知らにさまよへり偏路も目ざす寺々あるを

雑音のきこえぬよしと耳鳴りを気にせぬまでにわれも老いしか

（きさらぎ第一六六号　昭和三十六年五月）

まだ雫く庭の若葉に黄な蝶が三羽とび交へり晴れ待ちがてに

老らくの労れつもりて筆執るもののうき日つゞき梅雨未だ晴れず

無為徒食日課なき身は雨靴をはきて門ゆく人の羨しく

わが余生何にたとへむ道ばたの雑草のごと刈らるるを待つ

窓掩うがに青葉すがしき藤の蔓屋根までのびて文月となりぬ

（きさらぎ第一六七号　昭和三十六年七月）

病床歌

その日その日

窓白しわれをいたはる老妻にねがてぬよべの痛み語るも

あゝけふは元日よ東海の初日影すこやかならば拝みたかりし

初雑煮共に祝がむといふ吾子の言をうれしみ起きなむいざや

ぬるは易く起きむ苦しさ妻と子に抱へられつゝ腰をもたげし

腰もたぐせつなの痛さすべもなしまたも寝床にくづおれしかな

漸くに起きは起きつれよろめける身は投げかけて椅子にすがれり

長椅子に肱をばもたせ長々と足をのばして息づくわれは

湯に浸り身を温めよとふ言のまに初湯をわれは浴びにけるかも

午近し食卓に妻と相向きてよごと交しつ屠蘇くみにけり

雑煮餅一つを食べて朱の椀の色をたゝへて箸おきにけり

海の幸山の幸はあれ腰の痛みすべなしまたもこやりけるかも

おめでたうとうしろに孫の聲はきけね返り出來ねばその顔見ずも

晴着きて女孫ら来にけむ隣室にテレビ圍みてはしやぐ聲す

あ、痛(い)た痛たおぼえず叫ぶ悲鳴やも身のさゆらぎにさへ痛む坐骨は

痛みのま新春なればと温めて酒運びきぬ心づくしに

枕べににほふ酒の香なつかしみ思へどもせむなし飲まむすべなみ

渇きし日瓶ながらジュースをストロウにて飲みけることをふとおもひ出ぬ

盃につがで瓶子を手にもちてねながらに飲みぬあたらうま酒

うま酒は坐りて心くつろぎてひとりしづかに飲むべかりけり

おもはぬに寝正月しぬときじくに腰の痛みて起きがてわれは

訪ねこし語らまほしき稀人にも語りえで空しく別れし惜しさ

ケーキ一箇にきのふは足りぬけふも足らむ流動物のみに食欲はなく

いねながら飲むすべ知らに水を欲り口が渇くと人呼びにけり

われ病みてこやりつゝ飲む水のうまさ海の幸山の幸も豈しかめやも

九州の失業炭鉱夫東京に来て空気のうまさ語りしきくも

水と空気に生けらく幸を人誰れか常おもはめや病みて吾も知る

訴ふる心素直に老われは老の一徹警しめむとす

病みぬれば心さびしく人はみな千里の遠に住める如しも

板に身を縛られしごとさゆらぎも許されぬ痛さ人知るらめや

医師がその母を鍼師に頼らせけり神経痛は病ならぬか

鍼術にて治りし友をわれもきけ鍼いたからしこゝろ怯ゆる

まくらべに新聞おきてあり痛むまをうつら寝にけむ夜が明けて居り

時事きくもうるさくなりて新聞紙よむ朝あれどよまぬ日も多き

神経痛忘るゝ時間多くなりてつれづれがまたわれを攻むるも

晴雨なく寒暑もなしにわれめぐる壁と窓とのせまき天地

徒然に歌をこそ詠めよみし歌直に忘れておもひでがたき

われ圍みて無数に輝く星のありよく見ればわれも光る星なり

わが星に隣る星の子来て遊べ人間はなれてわれはさびしき

わらべ歌共に歌はむ手まりつき共に遊ばむわれも童よ

北の国は雪深しときく良寛は山の庵にいまもいまさむ

いにしへに芭蕉は旅に病みにしか水島爾保布は旅に死にけり

いよいよにふる里遠し京の山浪華の水のこひしきものを

只一途雲にのりてもゆかましを東風(こち)ふかぬ東京に来てをわが病む

万年を生きむに吾子孫その孫らわが血伝へていのち果てなく

欺かず媚びず嫉まず一すぢの道歩み来つ老いて悔なく

犬猫も自由に歩けりいたはられ檻に飼はるゝ身のはかなさや

望みいまは只早く起きたし坐りたし家の内外を歩いてみたし

初場所のテレビ見らえず次の室に大鵬負けしを聲のみにきく

微笑苦笑

無用の長物とみづから札貼りぬなぜ生きてゐるのかわからずなりぬ

道ばたに昔は破草鞋捨てゝありき捨てむに惜しきわが歌と夢

おもひでは楽しせゝらぐ谿こえて木樵の歌とうぐひすきゝし

山の彼方いゝことあるかと來てみればこゝも仝じく村づくりかな

タイル張りに農家の台所は改善され鞄もちて二男は町に勤むる

反抗期われにもありけむ家にこもり黙つてひとり寝そべりて居し

アツプアツプと白衣に鉢巻勇ましやナイチンゲールはいづち去にけむ

所得倍増の企画よろしも特別職の大臣が先づ範を示せり

山に住まぬ権僧正は僧衣きて小説をかき毒舌も吐く

風車風のまにまに廻るなり人生行路示すが如く

過剰人口の調節誰が頼みけむ人ころす人自殺するひと

脱獄囚のニュースに恐怖の街暗し犬を放ちて戸締りするも

公園といふ隠居所またも建ちにけり払下古椅子腰もゆたかに

砂利取り舟つなげる川瀬しづかなり砂利つめるトラックは走る走る走る

爆発して天心を焼く噴烟よわが胸の火は地下に燃ゆるに

放埒のわが世とおもへ刈りし芝生花咲く園はまだ踏まなくに

歩一歩に果てに近づくわがいのち虹と照り映え最後の一歩は

柿食めば大和なつかし峰こえて通ふ夫を待つかなし郎女

空中索道に国道切替へばや故障して無法運転手を宙釣りにすべく

九十四と文字すこやかな年賀状まう六つとも書き添えてあり

おもふ人に思ふことといふすべなさや思はぬことをおもはずもいふ

配達が一便となりし郵便をあきらめかねて午後も待つなり

七十年のわが休息を人知らばひと訪ねこむ知らざるよしも

草むらに鳴きしこほろぎ聲絶えし加茂の河原に見し冬の月

三年ぶり　夫君の勤務地印度に全棲しけるを

夏服きて新年迎えぬと書きてきぬ二度の新婚とよろこべる若妻

わが書きしわが標札も古りにけり新村出博士は歌の友なり

今治に堺に妹も老いけらしはろけきわれの病むと知らずて

わが文字を自ら読めぬは悲しからむ失明の友をまたきくものか

ボーナスの捨て場の如しデパートに押すな押すなと人争ひて

進物にリボンを結ぶサービス嬢も上昇景気の一點景か

有能とは予算を多く分捕ること庶民は納税のため働け働け

夕まぐれ塵埃(ごみ)よせ車ひきてゆく老人にふと足駐(と)めにける

ちまたにて似たる顔をばふと見つゝおもひ出せず別れけるかも

赤子さぶるわが介抱に妻忙し代筆頼めず文の書けぬ日

鋭き爪にもゆる血未だのこる胸裂きける悪魔に吾(あ)は似たらずや

近き寺にうちわ太鼓の音きこゆわれも叩かむ有髪の法師

雪崩(なだれ)に押されて死にし人ありきかなし雪崩は山のみならず

上景気に押されて貧困窮りつあてなき天國めざしゆきしも

酒は身を温むるてふ醫師の言酒はやめざり言かしこみて

欲しきものわがいはぬまに欲しきものたびける神に礼申さまく

み食(け)の神妻に形(すがた)を顕しませりうつそみ神はわが側(そば)にましき

ウヰスキーの香をよろしみて紅茶のむ珈琲もうましまた代へて飲む

漸くにねがへり出來てわが久に腹這ひて吸ふ巻烟草かな

鉄橋渡る汽車の轟音きゝければ去(い)にける友をはろにおもふも

東京塔いまだ昇らず柳橋も歩いてみたし春の夜の灯に

わが春はなきや心を揺がせて風木の梢を強く吹くなり

腰の痛み忘れてゐしをけさ寒し炬燵の火をばつぎ増させけり

病床歌百首を越えぬ旅ぢにて長くわがかく病むとおもへや

七草も小豆粥はた忘れをり季節はわれをおき去りてゆく

餌まけば小鳥もよりく病みぬれば訪ふ人稀に正月くれぬ

犬つれて白樺林朝をゆく獵夫羨しも病みておもへば

行商の千葉のおばさんの聲するもたつきのために霜ふみてこし

野菜つくり鶏飼ひてすごしけるのどかなりし日に吾も生きたかりし

食べざりしお粥を食べつ梅干をうましと思ひしけふの朝げや

冷蔵庫に仕舞はれしごとうつそみの手先きつめたしものかき居れば

ねて仰ぐ大空碧く晴れにけり久にわが見る碧き大空

君とわが名書きたる山の絵馬堂の絵馬もかなしく古りにけむかも

十三絃絃みな断れて空しくも夢の玉琴たてかけてあり

おもひでの名もなつかしき羽曳野に家建てて吾子の待つといふものを

香炷きて山の法師と歌詠みぬ杉の木群の百鳥のこゑ

またいつか夢に京都を散歩せり築地なつかし朱の御門も

足利氏をわれは憎めず杖ひきて室町邸趾に筧の水のむ

十二にて得度しませし門跡尼語りますみ聲はわれより若き

かにかくに吉井勇の亡きいまは祇園の灯映ゆる歌碑もさびしき

加茂女赤襷してすぐき漬売りにくる季節となりにけるかも

嵯峨の籔に井戸が残れりいにしへに定家の筆を洗ひける水

うつそみは病み疲れけむねがへりに夜具を重しとかこつなりけり

一興十三回忌民子一週忌に

香も炷けず病みこやる兄も近き日に死の階段を昇りゆくなり

おくれしをわびつゝ肩を並べゆくよみの妹背のおもかげに見ゆ

絶詠

（父の最後の詠で、作はいざしらず、孫弓子を八月十九日に枕頭に呼び清書せしめた。ただし自分でも書いて、汚なすぎるといふので清書せしめたことは、表紙写真によつて明らかである。）

こもりゐのねたり起きたり暑ければ臥る日を多み食欲もなき

わがやつれ目につきにけむうからどち來ては食べ食べとものすすむるも

いにしへの万葉人は夏やせにむなぎ召しきと歌にのこせり

うなぎ飯はた鮠汁うましうましと替えて食べなむ時は來ずやも

晝ねさめて渇けるのどにコーヒミルク一杯うまき夏さりにけり

年

譜

明治一六	一歳	六月、日本銀行（十五年十二月創立）国庫金取扱 七月、官報発行	二月十一日、大阪府西成郡今宮村（大阪市に編入後浪速区恵比須町四丁目）三二八番屋敷に生る、父喜代三郎三三歳、母み津二二歳
一七	二	五月、神宮職制を定む。 七月華族令制定。 京都二条城を二条離宮に治定	十一月七日、弟誠太郎生る。
一八	三	十二月、内閣を組織し太政大臣、左右大臣、参議、各省卿を廃す。	
一九	四		二月、父　今宮村戸長 十一月四日、妹貞生る。

（父の原稿により、括孤内のみ編者が補つた。）

二〇	五		六月、市町村制実施に依り父　戸長退職 十月十一日、妹嘉代生る
二一	六		
二二	七	十一月、立太子（大正天皇）	村立今宮尋常小学校入学
二三	八		五月、父　紙及薬種商開業 六月　父　大阪府会議員当選
二四	九	五月、露国皇太子大津の変 十月、濃尾大地震	一月十七日、弟　文雄生る 三月、父　大阪府会議員再選
二五	一〇		
二六	一一		今宮尋常小学校卒業 大阪市立育英高等小学校入学

			六月、父　司法省より破産管財人被命 七月、外祖母　岡島ふさ死去
二七	一二	八月、清国に宣戦	一月十七日、弟　一興生る
二八	一三	四月、清国と媾和 五月、遼東半島還付	一月、父　今宮村郵便受取所取扱人（特定郵便局長）
二九	一四		八月一日、父　破産管財人再命
三〇	一五	一月、英照皇太后崩御	五月十五日、妹嘉代死去 育英高等小学校卒業 大阪市立大阪商業学校入学
三一	一六	四月、京都豊公三百年祭 東京市民貧都三十年祭	五月四日、妹　茂子生る 十一月、大阪商業学校中退

三二	一七		日本銀行（大阪支店）奉職
三三	一八	五月、皇太子婚儀	五月十七日、妹　喜美子生る
三四	一九		
三五	二〇		二月、父　依願今宮郵便受取所取扱人被免、紙及薬種商廃業、恵比須区二丁目へ転居 十月十九日弟　英雄生る
三六	二一		浪速区貝柄町五一番地へ転居
三七	二二	二月、露国に宣戦	三月十六日、外祖父岡島伊作死去 九月十日、応召後備歩兵第三十七聯隊へ入営 十一月八日、妹　貞死去

三八	二三	三月、奉天会戦 五月、日本海々戦 十月、日露講和条約	十二月十九日、大阪築港乗船出征 十二月十九日、大連乗船凱旋
三九	二四		一月、召集解除 九月二十日、弟　文雄死去 （歌集「征塵」稿成る） （歌集「若き日に歌へる」稿成るはこれ以後）
四〇	二五		
四一	二六		
四二	二七		

四三	二八	八月、韓国合併	田中これんと結婚、天下茶屋に新居を営む（これん父甚城、母こしげ船越氏）
四四	二九		八月三十一日、長男克己生る 富士裾野めぐり
四五 大正元	三〇	一月十五日、南区大火 七月三十日、明治天皇崩御 大正天皇践祚、大正と改元 九月、大葬儀	十月十日、長女千草生る
二	三一		天下茶屋の山荘に移る
三	三二	四月、昭憲皇太后崩御 七月、第一次世界大戦	十月、二男瑞日子三男光日子聖 天阪の家に生れ、産後妻病みて 緒方病院入院中、十日三男光日

			子死去
四	三三		春、東成郡関目村へ転居 父、南区南高岸町へ転居 十月七日、妻これん関目の寓居にて死去 年末、南区馬淵町別荘へ移る
五	三四	十一月、立太子（今上天皇）	（歌集「白光」稿成る）
六	三五		三月、浜寺羽衣に移居 十月八日、二男瑞日子北河内郡四条村中垣内の里親方にて死去
七	三六	八月、米騒動	高師の浜（伽羅橋）に転居 四月二十日、神前静江と結婚
八	三七	六月、独逸国講和条約調印	二月二十五日、四男泉生る

		八月、西園寺大使帰朝	（歌集「道のちまた」稿成る）
九	三八	一月、世界平和克復の大詔	高石町葛葉に転居 十二月廿七日、二女咲耶生る
一〇	三九	三月、皇太子海外巡遊 九月、帰朝 十一月、皇太子摂政	十月二十六日、四男泉死去
一一	四〇		父母と大阪市南区南高岸町に仝居
一二	四一	九月一日、関東大震災	四月、長男克己今宮中学入学 五月、三女真砂生る 六月十一日、叔母藤田まさ死去
一三	四二		中河内郡高井田村（現布施市）新喜多二番地へ転居

一四	四三		父、東住吉区田辺西之町三丁目十番地へ転居 四月、千草樟蔭高等女学校へ入学 四月九日、五男建生る 六月六日、三女真砂死去
一五 昭和元	四四	十二月二十五日大正天皇崩御 今上天皇践祚、昭和と改元	（大阪時事夕刊に連載の歌「雑草の中に」はこのころまでの作）
二	四五	二月、大喪儀	高井田村新喜多十番地へ転居 十一月廿四日、六男大生る
三	四六	十一月、即位礼	四月、長男克己大阪高等学校入学
四	四七	六月四日、大阪行幸	
五	四八	十月二十六日、神戸沖観艦式	四月、長女千草樟蔭高女卒業 ことしはじめて老眼鏡をかける

六	四九	九月、満洲事変	長男克己東大文学部東洋史学科入学
七	五〇		（歌集「日月を仰ぐ」稿成る）
八	五一		二月十一日、生誕五十年の自祝宴を催す 四月二女咲耶樟蔭高等女学校入学 宝国寺檀家総代
九	五二	九月二十一日、室戸台風	三月、長男克己東大卒業 九月、日本銀行依願退職 十月、東北旅行 十二月四日、長弟誠太郎大阪日赤病院にて死去 十二月十三日、父田辺宅にて死去 （歌集「雑歌」『ひとり歌へる』稿成）

一〇	五三		二月、日銀旧友会幹事 三月、高井田を去り田辺宅に母と仝居 長男克己　柏井悠紀子と結婚
一一	五四		田辺教育会評議員 七月八日、克己長男史生る （歌集「東北遊草」歌集「皇陵巡礼記」歌集「自適集」稿成る）
一二	五五	七月、支那事変 十二月十三日、南京城陥落	三月二女咲耶樟蔭高等女学校卒業 十月二十四日、長女千草　青木陽生と結婚 （歌集「支那事変前後」稿成る）
一三	五六		三月、五男建天王寺中学校入学

			大阪市政治教育会委員 大阪鉄鋼線材製品工業組合経理課長 十月十一日、千草長男秀樹生る
一四	五七		九月二十五日、克己長女依子生る
一五	五八	紀元二千六百年祭	六男大　天王寺中学入学 田辺西之町三丁目町会副会長 二月十八日、千草長女美紗子生る （歌集「銃後に歌ふ上」稿成る）
一六	五九	十二月八日、米英に宣戦 〃　廿五日、香港陥落	田辺西之町三丁目町会長 北田辺町会聯合会会計幹事 妻しず江　〃　婦人部長 〃　愛国婦人会北田辺支部長 九月廿五日、克己次男梓生る （歌集「勝軍」稿成る）

一七	六〇	二月十五日、新嘉坡攻落	十二月十日、二女咲耶河野岑夫と結婚 （歌集「銃後に歌ふ下」「癸未詠草」稿成る）
一八	六一	五月三十日、アッツ島奪回せられ戦勢一変	日本亜鉛鍍工業組合書記長を兼ぬ 建　天王寺中学卒業、水産講習所入学 七月十六日母末弟英雄方にて死去 九月廿三日、克己次女弓子生る 九月廿五日、梓死去 山坂神社氏子総代 十月十八日、咲耶長男登夫生る
一九	六二		四月、六男大　皇学館大学入学 五月朔日、末弟英雄死去

			五月廿八日、京都市上京区小山下総町四五に転居 十月五男建豊橋予備士官学校入学 工業組合解散　精算事務 （歌集「草莽の歌上、下」稿成る）
二〇	六三	八月十五日、終戦	三月十八日長男克己応召北支出征 六月、五男建豊橋予備士官学校卒業、八月、任陸軍少尉 （歌集「余燼集」『丙戌正月日誌』『仝如月弥生日誌』「仝陽春日記」「仝九月の日記」「秋の歌」稿成る）
二一	六四		大、皇学館大学廃校となり国学院大学に転学 建、水産講習所に再入学 小山下総町西部下町会長

二二	六五		三月、五男建、六男大共に卒業 五男建　三重県に奉職 十二月二日、咲耶二男幸夫生る （歌集「丁亥集」稿成る）
二三	六六		三月一日、克己三女京生る （歌集「平安抄」稿成る）
二四	六七		一月廿三日、弟一興　旅中大阪にて死去 四月廿四日、五男建山本治と結婚 （歌集「待春門」同「暗雲」稿成る）
二五	六八		七月二十三日、建長男順生る （歌集「庚寅集」稿成る）
二六	六九		（「歌集解題」稿成る） （歌集「春より夏へ」同「灰色

			の雲」稿成る）
二七	七〇		小林政株式会社顧問 （歌集「壬辰歌日記」稿成る）
二八	七一		東亜通商株式会社監査役 四月十八日、建長女恵子生る （歌集「路旁の花」同「濁流」稿成る）
二九	七二		富士鋼業株式会社嘱託 （歌集「甲午第一集」「同第二集」稿成る）
三〇	七三		（歌集「晩花抄、上、下」稿成る）
三一	七四		小林政株式会社顧問解嘱 （歌集「続晩花抄」稿成る）

三二	七五		（歌集「残葩集」稿成る） （大に宛てた手紙を編した「父の手紙」稿成る）
三三	七六		大阪熔接棒工業組合嘱託、富士鋼業株式会社嘱託解嘱 十二月、父の二十五回忌を営む
三四	七七	九月廿六日、伊勢湾台風	二月八日、燕庵にて喜寿祝賀筵 四月十六日伊勢市浦口町三一六建方に同居 日銀旧友会幹事、宝国寺檀家総代辞任 （歌集「歌日記」稿半ば成る）
三五	七八		（五月上京、六月伊勢に帰る 十月再上京、渋谷区猿楽町三、

		大方に入る） （十月、静江と佐渡に旅行）
三六	七九	（五月、姑たけの七回忌をかねて関西旅行、帰京後寝たり起きたり） （歌集「病床歌その日その日」を清書す） （八月半、常時病床にあり 二十日午后七時二十五分永眠 二十二日大宅にて仮葬 九月二十四日大阪宝国寺にて本葬）

あとがき

自らも不肖どももさうと考へ及ばなかつた瀕死の病床で、父がのぞんだことは、八十歳になつたら日銀旧友会から贈られるはずの鳩の杖と、一万首ある歌の刊行とであつた。前者はともかく、後者は不肖どもが努力足らず、やつといまとなつて、最後の二年半の歌だけを刊行する次第である。刊行の日を父の誕生日にとつたのがせめてもの心やりであるが、若い時は性急であつた父も、晩年は怒らずせかずといふ様子だつたので、これをも「仕様がない」と喜んでゆるしてくれると思ふ。

二年半の歌を全部採つたのは、不肖らの怠慢のいたすところでもあるが、ものみな歌になるのが父の天性だつたことを編輯に際して痛感したので、巧拙によつてあへて選ぶなどの挙にも出でなかつた。一万首みなこの調子で、気楽に好きなままに詠じて、それがみな歌となつてゐるのである。

このものみな歌とする天性は、五十年ベターハーフとして家事を担当しながら、歌だけは関係ないと自らも不肖どもも思つてゐた母をして、通夜の席ふしぎな吟を

なさしめた。「これ見て」といつて差出したのが三十一字で、しかもおのづと他人のいひ得ぬ夫婦の情を、巧みに写し出してゐた。

君とはに眠りたまひし安らかなみすがた拝し悲しくうれし

といふのがこれであつて、結句のたくまずして無限の情をなしてゐるのを、故人の感化ここに至つたかと、不肖どもも喜んだ。

いま二年半の歌業と、自らほぼ作り了へてゐた年譜とで一巻となした。印刷には不二歌道会の御好意を受けた。記してもつて後がきとする。

昭和三十九年二月

田中克己
西島建
西島大
青木千草
河野咲耶

歌集「歌日記」

昭和三十九年二月十一日　発行

編集者　田中克己
発行者　西島大